

NO-MA 2013.6 / VOL.15

ボードレス・アートミュージアム  
NO-MA ニュースレター

展覧会レポート

対話の庭 Dialogue of Garden

Topic of NO-MA

【企画展関連】  
カソケキ+チカラ 宮永愛子氏 特別インタビュー

ABCColumn

アール・スリュットを巡るコラム VOL.5

地域インタビュー

あのひとの近江八幡スタイル 本間牛乳 本間 繁利氏

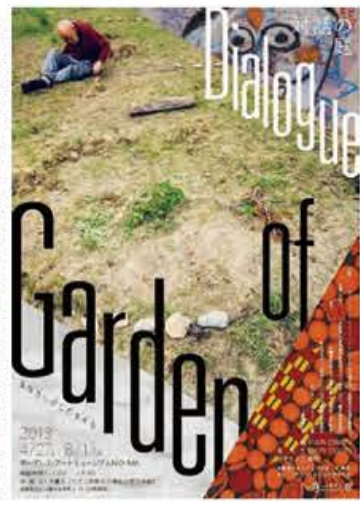




展覧  
会  
レポート  
Exhibition Report  
文：横井 悠 (本展担当)  
写真：大西 暢夫

対話の庭 Dialogue of Garden  
—まなごころが—

2013年4月27日(土)～8月11日(日)



後援：滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会  
協力：滋賀県立松山高等学校、彦根学園、平川病院(造形教室)、  
一般社団法人水口病院、D.C.、近江八幡市立博物館、  
NPO法人しみんくし滋賀、八幡酒造工場



2階展示室



1階展示室

本展では、人間が本来もつ「対話」という根源的な営みに目を向けている。この視点を展覧会全体の骨格に据えることで、直接的には語らない作者や、言葉を発することのない作品の生の声を聴く手がかりとなるのではないかと考えた。

1階では、絵画を中心に展示している。会場中央で存在感を示すのは沢井実。たくさんの情報がつまった画面は、みるものに数多のインスピレーションを与える。杉本たまえの作品の前では、来館者も思わず感嘆のためいきをこぼす。つかみどころのない感覚に深く向き合おうとする彼女の姿勢を感じとるのだろう。紙にマーカーというシンプルな素材を使って描くのは石原峯明。ドットや幾何学模様を多用した一連の作品を通して、石原が歩んできた対話の軌跡を辿ることが出来る。

庭の随所に点在している写真は、草、枝、石などを拾ってきては並べて置くということが続いている坂本三太郎の活動の記録。庭全体に坂本の手が加わっているような、そんな錯覚すら感じていたのではないのか。蔵の中で輝きを放



岡本光博「ST#323 LIFEline」(2013)

つジュエリーは、気鋭の若手アーティスト林智子による作品である。涙と、涙にまつわる物語をモチーフにした「Tear mirror」は、みるものを共鳴体験へと導く。

2階へ伸びる電気、ガス、水道のコード。「最初は工事中なのかと思った」という感想も作家の思惑である。その導線は岡本光博の「ST#323 LIFEline」につながっている。この作品にはじまり、2階の会場では、胸を直球で射抜くようなエネルギーを携えた作品を展示している。鷺見鷹の作品は100号キャンバス7点組の超大作である。自身が描いた一枚の絵を模写し続けるというこの作品は、模倣の域を超え、強烈なオリジナルへと転換している。新屋喜生による限りなく無垢に近い造形は、粘土を太鼓のように抱(かか)くことで生まれる行為の痕跡である。制作風景の映像から流れる軽妙なリズムは、空間全体を包み込む。

ひたすら繰り返す対話の果てに生み出された作品たち。出展者8人による対話の方法は独自路線をひた走り、そのため表現の振り幅はどこまでも大きい。本展では、老若男女、誰もがどこかグツと心に響くポイントを見つけられるだろう。

ノマ  
Topic of  
NO-MA  
トピ

カソケキ+チカラ  
宮永愛子さんインタビュー

〔次回企画展〕  
編：藤戸さゆみ(本展担当)

企画展「カソケキ+チカラ」が、8月24日(土)からはじまります。今号では出展作家の宮永愛子さんに、ご自身の創作の原点をうかがいました。そこからはオール・ブリュットとも通ずる「表現することの普遍的な力」が見えてきます。

【「これしかない」という表現】  
作品を作るには、こだわりがないとできないと思うんです。そして、「ここまで行く」と決めたら行くしかないと思います。オール・ブリュット作家は「これしかない」という表現をされると思いますが、これは私も他のアーティストも同じだと思います。ですので、オール・ブリュットや現代アートなどを区別して意識することが全くありませんでした。私にとっては、それがとても自然なことで、皆同じ「表現者」だと思っています。

創作するときは、自分がやりたいこと、興味のあることがまず先にあります。でもそれがなぜ生まれきたかという、自分が歩いてきた足跡や、育った環境、今いる場所

がそうさせているのだと感じます。美術史の流れを意識したり目的を定めてしまうと、それ以上のものは生まれてこないような気がします。

【「枠がない」ことを知る】  
実家が窯元ですので、陶器の勉強もしました。陶器そのものに興味があれば陶芸家になっていたと思います。でも私は、陶器を作ることより、陶器が纏う雰囲気やその歴史、窯元である家にまつわる時間、つまりその境目や周りのことに興味がありました。

幸運だと思うのは、普通、窯元には素材や焼き方など

お家芸のように伝承されるものがありますが、私の家の場合、それは「芸術家」であることだけです。同じ陶芸家でも、曾祖父はデザインを、祖父は使いやすい食器について追及していました。父は現代陶芸家として、実用からはかけ離れた所で表現の探求をしていました。ですので、身近な陶芸ひとつをとっても「枠がない」ということを、私は早くから知っていました。そのことに気づかなければ、何か表現したいと思った時に、足枷になって生まれなかったかもしれないものが、あまり抵抗もなく始められました。

【身体に染み入るアートを】  
私は子どもの頃から音楽が好きでした。私以外に、家族の中で音楽をやる者はいなかったのですが、小学三年生頃からコーラスを始め、音の重なりを体感することに魅力を感じていました。美術はどうしても、作品のある場所まで人が出向き、作品を前にして作品と関係を築く必要があります。でも音楽は、聴いた瞬間に毛穴から染み入る感じがします。この感覚はすごいと思います。音楽で体験した感覚を、美術にしかできないやり方で表現していきたいというつもっています。



nakasora - waiting for awakening  
2012  
Naphthalene, resin, mixed media  
55.8x67.9x110cm  
photo: KIMURA Kazuho  
(c)MIYANAGA Aiko  
Courtesy Mizuma Art Gallery  
宮永愛子展「house」開催中 2013年6月12日(水)～8月3日(土)  
ミヅマアートギャラリー <http://mizuma-art.co.jp>

宮永愛子

1974年京都市生まれ。2008年東京藝術大学大学院修了。日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩を使ったインスタレーションなど気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。昨年国立国際美術館にて個展「宮永愛子：なかそら一空中一」を開催。



photo: ARAI Takashi

展覧会会期  
8月24日(土)  
12月15日(日)

展覧会の詳細については裏面をご覧ください。



「野生の科学」から語る  
アール・ブリュットと  
アンリーダブルな表現



中沢新一さん  
講演より

アール・ブリュットを巡る  
トークシリーズ 視点5

【ゲスト】中沢新一/人類学者  
明治大学野生の科学研究所 所長

【聞き手】保坂健二郎  
東京国立近代美術館主任研究員

日時: 2011年11月19日(土) 15:30~17:30  
会場: 明治大学 野生の科学研究所

文: アサダワタル  
アール・ブリュットを巡るトークシリーズ ディレクター

一昨年11月19日の回は明治大学野生の科学研究所を立ち上げた人類学者 中沢新一さんが登壇。「野生」というのは、あらゆる文明や文化や制度に飼われられていない原初的なものを指す。何の加工もされていない状態の心が、人間の営みの中で働いているということ仮定し、人間が行うさまざまな現象を理解し直したり、あるいはそれを創造の原理として捉え直そうと考える。そういった「野生の科学」的思考を通じて、アール・ブリュットを掘り下げていく時間へと突入していった。

中沢さんは、ここ数年、ダウン症の人々が描く絵画を「アール・イマキュレ(天使みたいな、無垢なアート)」という概念で捉え直し、それらの研究に従事。そこから「人間の原初的な心に踏み込んでいくための大きな道が開けた」と話す。聞き手の保坂さんの「では、アール・ブリュットとアール・イマキュレの違いとは何か?」という問いに対し、中沢さんは「ヘンリー・ダーガーなどの作品例を引きながら「アール・ブリュット」の作品の特徴のひとつとして、戦争の場面が非常に多いということ」と答えて、続け

て「しかし、ダウン症の方の絵画には戦争がなく、色彩も戦争しない。完璧なぐらいの調和を保っていて、とても平和的。人間の心の探求をした結果、その原初的な心の中に、戦争がない世界が大きく広がっているのではないかと考えたのです」。また、「平和」であることの構造上の特徴として「アンリーダブル(言語として読めない)」という解釈を紹介。「平和学」の確立に挑んできた過去の文学者、哲学者のそのアンリーダブルな表現実験における構造の共通点(例えば、ジェイムス・ジョイスの「フィネガンズ・ウェイク」や、フィリップ・ソレルスの「天国」などを参照しながら、物語や言語が介在しない、「場」そのものとして作品のあり方の可能性についての議論をさらに深めていった。

さて、このトークの後日、中沢さんは思想家の内田樹さんとの対談共著『日本の文脈』(角川書店)を上梓。3・11の震災、福島原発事故後、私たち日本人が進むべき方向を示した書籍だ。「今までは、戦間少女なんてアニメで見ていればよかった。でもあれ、もう現実になっちゃったから。本質は変わらないけどそれを

語る文脈がぼきと折れるように変わったんです」と中沢さん。そうであれば、このトークに引き戻して考えた時に、おそらくアール・ブリュットを語る、あるいはそこから編み出される思考の枠組みを使う上での文脈もまた変わったのではないか。このような問題提起を前提に、美術館や美術系大学のあり方、美術館や美術系大学という制度の機能性の問題などなど、2人の議論はさらに加速していく。中でも、これまで往々にして経済的な価値観でのみ評価されがちだった芸術家を、うらやむ対象でも、疎外する対象でもなく、ともかく支える対象であるというふうに変えていくべきだというのは2人にも共通した考え方のようだ。そのための起爆剤としてアール・ブリュットというものがどのように広がっていくのか。こういったトークの場を通じて、とにかく議論と批評を繰り返していくことの必要性を確認し、まだまだ尽きそうにないトークは一旦終了時間を迎えたのだった。

※本稿はドキュメントブック「アール・ブリュットを巡るトークシリーズ」に掲載したコラムの短縮版です。詳細解説をご希望の方は、NO-MAホームページ内にある「アール・ブリュットを巡るトークシリーズ」報告書無料ダウンロードのご案内をご覧ください。



<http://www.no-ma.jp/?p=4960>

地域インタビュー  
ohai-hachiman local interview

「地域の繋がりが一番大切やと思う」  
町を見守り続けてきた、みんなの牛乳屋さん

本間牛乳 本間繁利氏

文: 木元聖奈(学芸員)



午前中にNO-MAにいと、活気のある声や、運ばれていく牛乳瓶が奏でる鈴のような音が聞こえてくる。

NO-MAの隣にある本間牛乳は、大正5(1916)年に創業し、現在は3代目の本間繁利さん、4代目の仁さんが切り盛りする町の牛乳屋さんだ。県内には地元の牛乳製造元が10軒あるが、そのうち6軒が近江八幡に立地している。これだけひとつの街に集中しているのは、全国的にも非常に珍しいという。

スーパーには日持ちのする牛乳や乳成分を調整した牛乳が多く並ぶが、本間牛乳は、毎日、地元の酪農家から新鮮な生乳を仕入れ、牛乳本来の美味しさや栄養価を損なわないよう、低温殺菌で時間をかけて作っている。「その製法を守ることができるのは、地元の牛乳をその土地のお客さんに届けているから」。牛乳について教えてくれる本間さんの言葉からは、昔ながらの方法を守り続けるという強い意志がにじむ。「近所のおじいさんは、小さい頃からずっと飲んでくれている」、「今まで子どもが牛乳を飲まなかったのに、この牛乳だと喜んで飲むと言ってくれて」と話す顔がほころぶ。

美しい町並みが残る近江八幡の旧市街。この地で生まれ育った本間さんは、この町の移り変わりを静かに見守ってきた。近年、観光地として賑わう一方で、世帯数が減っているこの町のこれから見つめている。「地域の繋がりは一番大切やと思う。人と人の絆がないと何もできない」。優しく控えめに話す本間さんだが、地域の活力として、人や施設が増えること、その繋がりを大切にするを話し合っていくと、胸に打ち込むように語ってくれた。NO-MAが開館した時のことを尋ね

てみると、「最初はなぜこんな住宅地に!?!と疑問だった。当時は、新しい施設や店舗が無かったから不安だったのかもしれない。今となっては、NO-MAだけでなく様々な人や団体が町屋を活用し、遠方からも人が集まっているので嬉しい」と話してくれた。NO-MAは心強いお隣さんにずっと見守られてきたのだ。今年、区の会長を務める本間さんは、今夏に納涼祭を企画している。地域の子もや一人暮らしのお年寄り、みんなが声を掛け合う交流の場になればと思い立ったという。あと3年で創業から100年を迎える本間牛乳。写真アルバムを開くと、初代や2代目が町の人たちと笑顔で並んでいる。地域の繋がりはこうして大切に受け継がれてきたのだ。



約45年前の店先で撮られた1枚。少年時代の本間さん。



あのひとの  
近江八幡  
スタイル

さわやかな香りと  
すっきりとした味わい。  
瓶入り牛乳は各90円。



本間牛乳

近江八幡市永原町上15  
☎0748(32)2370  
Open 8~17時  
日曜定休



## 「対話の庭 Dialogue of Garden—まなざしがこだまする」展+関連イベント

2013年4月27日(土)~8月11日(日)

※月曜休館。ただし祝祭日の場合、翌日休館。

Ⓕ 11:00~17:00

Ⓢ 一般300円・高大生250円

中学生以下、障害のある方と付添者1名無料  
20名様以上の団体は各50円割引主催：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA  
社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団  
後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、  
近江八幡市教育委員会  
協力：救護施設 松山荘、彦根学園、平川病院  
(造形教室)、一般社団法人 水口病院、  
DIG'S、近江八幡観光物産協会、NPO  
法人 しみんふくし滋賀、八幡酒蔵工房

## 講演「対話という迷路」

講師：小林昌廣 (IAMAS情報科学芸術大学院大学教授)  
医療、哲学、芸術の3つの視点から、人間において最も重要な営みと言える「対話」の本質に迫ります。小林昌廣教授に、わかりやすく、しなやかに対話の迷路をご案内いただきます。

2013年7月6日(土) Ⓕ 13:30~15:00

📍 野間清六郎 (NO-MA向かい)

定員：30名 (要予約、定員になり次第締め切り)

Ⓢ 無料

## 夕暮れNO-MA de ギャラリートーク

講師：横井悠 (学芸員)

2013年7月19日(金) Ⓕ 18:30~19:30

📍 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

定員：20名 (要予約、定員になり次第締め切り)

Ⓢ 無料 (ただし展覧会観覧料が必要です)

※当日は20:00まで特別開館いたします。

## 夏休み企画ワークショップ

## 「あの日の思い出は何色？」

## 記憶のジュエリーを作ろう

2013年8月3日(土) Ⓕ 13:30~15:30

講師：林智子 (出展作家)

アーティスト林智子さんを囲んで「おもいで  
のジュエリー」をつくります。みんなと過ごして  
楽しかったあの時、人生でいちばん泣いたあの  
日——言葉ではうまく表せない思い出を、ワ  
ークショップでつくる、きらきら輝くジュエリー  
に込めて参加者全員で分かち合います。

📍 場所は途中で移動します

13:30~ ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

14:00~ DIG'S (近江八幡市為心町上19)

定員：20名 (要予約、定員になり次第締め切り)

Ⓢ 無料 (ただし展覧会観覧料が必要です)

## 「カソケキ+チカラ」展

2013年8月24日(土)~12月15日(日)

※月曜休館。ただし祝祭日の場合、翌日休館。

Ⓕ 11:00~17:00

Ⓢ 一般300円・高大生250円

中学生以下、障害のある方と付添者1名無料  
20名様以上の団体は各50円割引主催：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA  
社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団  
後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、  
(予定) 近江八幡市教育委員会  
協力：株式会社ミヅマアートギャラリー、  
社会福祉法人やまなみ会やまなみ工房、  
クリエートプラザ東近江能登川作業所、  
近江八幡観光物産協会、  
NPO法人しみんふくし滋賀、  
八幡酒蔵工房

## NO-MA 今後の貸館展示

「草木染織~自然はやさしい  
たおだみさこ作品展」

2013年8月15日(木)~18日(日)

Ⓕ 10:00~17:00 (最終日は15:00まで)

Ⓢ 無料 主催：たおだみさこ (個人)

※ご予約・お問い合わせはボーダレス・アートミュージアムNO-MA (下記)まで

※NO-MA主催の次回企画展は詳細が決まり次第、ホームページなどでご案内いたします

はたよしこ 【編集長はつぶやく】  
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA アートディレクター

私は大阪の国立民族学博物館で開催された「プリコラーージュ・アート・ナウ」(2005年)という企画展に関わったことがある。企画者に依頼され私も実行委員となり、現代アートの作家と9人のアール・ブリュット作家たちに参加してもらった。プリコラーージュとは著名な文化人類学者レイヴィ・ストロースの概念で「野生の思考」とも呼ばれ、ある道具が、その用途を逸脱して全く別の物として機能することを指す。たとえば、「未開地の人達が、観光客が捨て去った空き缶を拾い、それを変形させてヘルメットなどを作る」発想の力だ。既存の思考回路を飛び越えて、まったく別の世界を形成する人間の想像力は、大きく捉えれば「アート」の本質そのものなのだ。

自分自身の発想と感性を頼りに、伝統や技術や社会的序列に寄りかからず、画壇の流派や序列を頼りにしないアーティストたちは、アール・ブリュットの表現者と近しいと、その展覧会でつくづく思ったものだ。この展覧会は異例の入場者数を上げ話題となった。ボーダレス・アートミュージアムNO-MAは、これからも様々なカタチで「人間」と「表現」を考える場にしていきたいと思う。



ボーダレス・アートミュージアム NO-MA



滋賀県近江八幡市永原町上16

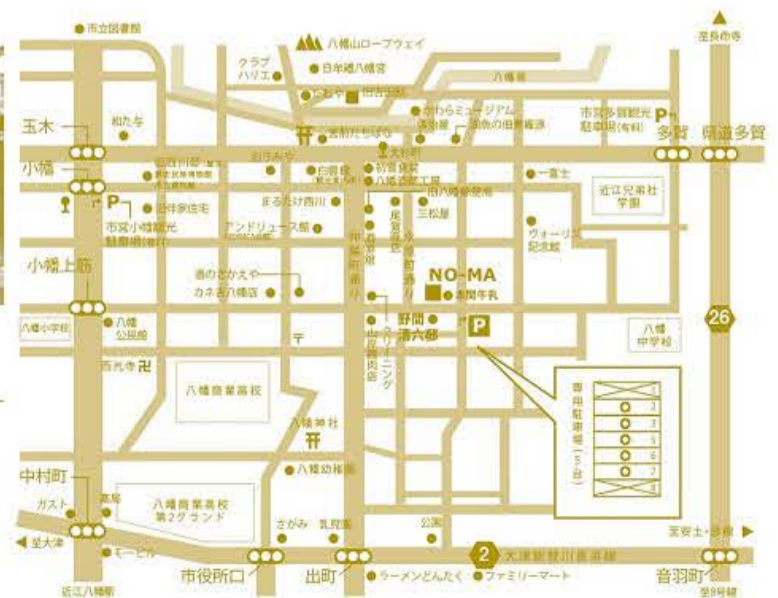
TEL/FAX 0748-36-5018

休館日：月曜日

(月曜日が祝祭日の場合は翌日休館)

E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp

http://www.no-ma.jp



バス JR近江八幡駅から近江鉄道バス(長命寺行き)大杉町バス停下車 徒歩10分  
 車 名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・8号線」方面に出る 国道8号線「西横関」交差点右折  
 「東川町」交差点左折 県道2号線「小幡木町」交差点右折 「出町」交差点左折 (計30分)